

戦争と風土学——「戦争」について (1)

○シリーズの趣旨

風土学の立場から、「戦争」にアプローチする。過去に取り上げたことのないテーマへの挑戦。全5回のプログラムは未定。今回は、風土学にとって「戦争」というテーマがもつ意味を考える。「戦争」の概念（定義）を示し、3つのポイントを取り扱う手順を検討する。対話をつうじて方針を固めつつ、必要に応じて修正・変更を加えていく。

○考えるべき主要ポイント

- ① 戦争とは何か（事実）
- ② 戦争はなぜ起こるのか（理由・原因）
- ③ 戦争をどうすれば止められるか（当為）

○「戦争」の定義（案）

「**社会空間**の〈変容〉を生む実力行使。他の空間に対する攻撃、主に越境による侵略と、それに対する防衛・反攻によって生じる、空間の破壊。多くの場合、当事者の国・地域同士の衝突に、他の国・地域が連動することによって、大規模化する」

○「社会空間」とは？[→「風土学の基本用語」]

「物語空間を統括する権力によって成立する〈場〉の複合体。複数の〈場〉および〈場〉の背後に広がる空虚の全体」（『風土の論理——地理哲学への道』 p.351）

[要点]

- 1) 趣旨——戦争をめぐるおしゃべりではなく、哲学（風土学）による本質解明を目的とするシリーズである。後期全5回のテーマとするも、第2回以後の内容は未定。
- 2) 三つのポイント——戦争の**事実・理由・当為**の3点は区別されるものの、絡まり合っている。〈事実〉とはどういうものかについて、各自の見方（関心の所在）を明らかにされたい。議論の際には、3点のうちの何が焦点かを意識すること。
- 3) 定義——暫定的な案、議論の叩き台とする。「定義」は〈事実〉から引き出されるが、事実のすべてではない。風土学の中心概念は「空間」。とりあえず、「社会空間に生じる変容」という視点をうちだした——「空間」は何もない広がりではなく、関係し合う社会（人間）と自然を含む。
- 4) 「空間」——「主体の行為的实践…」は、〈あいだ〉（出会い）に関係するふるまいの意味。空虚ではなく、〈人と人のあいだ〉を意味する。地理哲学的な考え方[→HP「自著を語る」(1) 8.21 更新]。「物語空間」と「社会空間」の区別、関係を概説。
- 5) 対話の要領——各自の戦争に対する関心の所在を披歴する。考えたいこと、気になることが言語化できれば、そこからシリーズとの接点が生じる。①取り上げてほしい話題・論点を提出する、②自身の考えたいテーマを選んで「哲学対話」で発表する、のいずれか。②によって、「哲学講話」と「哲学対話」が連動することを期待する。

[3点についての補足]

- ・①「戦争」と「平和」とは、たがいに規定し合う反対概念。「戦争とは何か」と平和への問いとは不可分。「戦争がない状態」という消極的定義ではない「平和」の理念はあるか。
→テーマ（例）：「**戦争と平和**」「**カントにおける〈平和〉の意味**」
- ・①事実として、古典的な地上戦を想定したが、情報化が生み出した「サイバー戦争」などを考慮する必要がある。〈情報化〉と風土との関係は、風土学によってまだ十分に取扱われていない問題。「戦争」という角度から、このテーマに切り込む線も考えられる。
→テーマ（例）：「**情報（化と）戦争**」
- ・①比喻としての「戦争」——ex.「受験戦争」。じっさいの戦争ではないが、近似的な意味をもつ物事について、「戦争」の比喻が用いられる。われわれの日常は、「戦争」の比喻が当てはまる事態にあふれている——cf. 学校、会社、その他社会の現実。これらについて、それが戦争と呼ばれることの本質を問題にすべきではないか。
→テーマ（例）：「**日常の中の戦争**」
- ・②理由・原因を「空間（>人間、土地）の支配」として限定すれば、定義は「社会空間を支配しようとする欲求（欲望）から生じる実力行使」として、より限定される。
→テーマ（例）：「**欲望と戦争**」
- ・③当為として最重要の案件は、将来にわたって④「戦争が惹き起こされない」ための原理的努力を見すえつつ、現に生じている⑤「戦争を止めさせる」こと。戦争が生じている現実

を認めただうえで、現状にハドメをかけるために、何ができるか。㉔と㉕とは、課題の意味が異なる——「平和学」は㉔に関心を寄せるものの、㉕に対して何もしていないように見られる。㉕の文脈で重視されるのは、〈対話〉。∴対話の進行中は、戦闘は中断される。風土学の実践論は、〈出会い〉がテーマ。〈あいだを開く〉行為の焦点は、対話の成立である。

→次回のテーマ（例）：「〈対話〉の条件」（Cf. 「〈二〉と〈三〉のあいだ——対話の条件」）。